
てのひらの天球儀

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てのひらの天球儀

【Zコード】

Z3367Z

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

300字～500字程度の詩を収録した詩集。つれづれなるままで綴りゆく言の葉たち。【不定期更新】

青ざめた月の光が射す夜に
きみは何を思つのだらう

凍てつくよくなさみしい夜に
きみはぬくもりを求めず
だれかの肩に寄りかかりもせず
ただひとり まっすぐに立つてこる

その後ろ姿は
凜と美しく
胸を震わすほどに哀しい

きみはきっと
差しのべられた手など振り払つのだらう
生ぬるい馴れ合いなどではなく
真冬の海に沈むような孤独を選ぶのだらう
まやかしと知りながらも
春の陽^ひの下を往くわたしを睨むのだらう

きみは弱い
けれどもそれを知り 認めているからこそ
強いのだ

きみは立つ 寒々しく輝く月を見上げ
まるで咲き誇る 一輪の花のよつこ

S i l e n t r a i n

静かに
ただ静かに
音も立てずに
雨が降る

隣に立つたあなたの
窓から差し出した指先に
ビーズのような雨粒が
弾けた

「冷たいね」

なぜか楽しそうに
あなたは咳いて
わたしは ただそれを
ぼんやりと見つめていた

「雨は好き?」

「ううん」

それなのに
なぜ そんなにはしゃぐのか
わたしにはわからなかつた

「でもね」

あなたは指先を濡らしながら

「雨上がりとか、虹が出るから、好きかもしれない」

笑つて答える

その横顔を

やつぱり わたしはほんやつと見つめていた

静かに

ただ静かに

音も立てずに

雨は降る

けれど この静けさの向ひに

世界が美しく見える 何かがあるのだとしたら

わたしは この静けさを

好きになれるのかもしね

ひとつもない、なんて

どうしようもない　なんて

言わないでください

もう駄目だ　なんて

勝手にあきらめないでください

わたしの限界を

決めないでください

わたしの可能性を

捨てないでください

わたしの努力を

終わらせないでください

わたしはまだ　前に進みたいのに
その歩みを　あなたの判断で
止めないでください

あなたは　ここまでかもしれないけれど
わたしは　その先へ行くのです
あなたは　投げ出すのかもしれないけれど
わたしは　まだ抱えていたいのです

あなたの限界を
あなたの不可能を
あなたの終わりを
わたしに押しつけないでください

わたしとあなたは
違う人間なのだから

友よ

肩を並べ 幼き日々を駆けた人よ
あなたは今 どこにいるのだろうか

道を分けたあの日と同じ 花開くときを待つ季節がめぐろうとしている

時を重ね 夢見る蛹のままではいられなくなつたけれど
あなたは いつか思いを馳せた空に 鮮やかな翅を羽ばたかせて
いるのだろうか

あなたはきっとしなやかに 上手に飛ぶのだろう
おそれを抱き それでも必死に翅を動かして
風に乗って 高く高く 遥かな陽の許まで

友よ

涙を分かち合い 笑い合つた人よ
わたしは祈るう
あなたの翅の行く先にある幸せを
あなたの知る空の美しさを
祈り続けよう

どうか あなたを運ぶ風が 優しいものであるよう

空が燃えています

赤く 赤く

瞳の底まで焼き尽くすように

静かに 鮮やかに

空が燃えています

この窓から あなたとふたり
何度沈みゆく夕陽を見つめたでしょ
う
その美しさを惜しむように

黄金色の光が消えてしまったまで ずっと佇んでいましたね
口を開くことさえためらわれる沈黙のなか
けれど わたしは満たされました
世界の終焉をあなたとふたりきりで迎えていたので
とても幸せでした

空が燃えています

赤く 赤く

瞳の底まで焼き尽くすように

静かに 鮮やかに

空が燃えています

あなたと並んでこの窓から見る最後の夕陽
もう一度と くり返すことはないとわかっているからこそ
こんなにもまぶしいのでしょう
いつもと同じ沈黙を

わたしはじめて息苦しく感じています

あなたとともに迎えるものは世界の終焉ではなく 続いていく世

界であつてほしかつたのです
わたしが惜しむべきは夕陽の美しさではなく　あなたともに在る
時間だったのです

空が燃えています
赤く　赤く
瞳の底まで焼き尽くすよひに
静かに　鮮やかに
空が燃えています

この黄昏があなたの心に刻みついてしまえばいいと　願いました
永遠の烙印のように

欲しかつたものがあります

それは強さであつたり
それは美しさであつたり
それは賢さであつたり
それは恋人であつたり
それは友達であつたり
それはお金であつたり
それは時間であつたり
それは才能であつたりしました

欲しかつたものがあります
欲しくて欲しくて しょうがなかつたものがあります

けれど 本当に欲しかつたのは
つけ焼き刃の強さではなく
作りものの美しさではなく
努力の伴わない賢さではなく
真似事の恋人でもなく
うわべだけの友達でもなく
貰うだけのお金でもなく
怠惰の生む時間でもなく
他人の才能でもありませんでした

それは搖るぎない 世界でただひとりの『わたし』でした

べひなしの花（前書き）

「も想ゆ。」

どうしてでしょう
わかつて いたはずなのに
いつか この日が 来ると
あなたに せよならを 言わなければならぬ ときが 来ると
わかつて いたはずなのに
あなたに 告げるべき言葉が
出てこないのです
溢れる 想いを 口に する ことが こんなにも 難しい なんて
たつたひと言 告げること が こんなにも おそれしい なんて
それでも わたしは 言わなければなりません
去りゆく あなたを 見送らなければなりません
あなたとの日々を 終わらせなければなりません
これからも わたしが わたし である ために

今のわたしは わがままな 子どもなので します
先延ばしに 過ぎない けれど
あなたの 記憶を 思い出に 变えることは 早すぎます
手を 伸ばせば そこには いる ようです
砂の ように こぼれ落ちて いく 面影を まだ 留めておきたいのです
どうか あともう少しだけ
わたしを くちなしの花で いたして ください

ピーター・パンにさよならを

大人になりたくないと願つたことも
大人になりたいと願つたこともあります

日々は変わることなく いつまでも続いてゆくと思っていたあの頃
永遠の子ども時代は夢物語ではなく ごく当たり前のことでした
小さな小さなわたしの掌の中には
大きな大きな世界のすべてがあつたのです

とめどなくこぼれ落ちる砂のように時が流れ
はじまりには終わりがあることを
わたしが世界のなかにいることを知りました
もう背伸びをする必要はなく
わたしの目は しっかりと道の先を見据えることができます
そこに向かって この足で歩いてゆくために

大人になりたくないと願つたことも
大人になりたいと願つたこともあります
記憶のかけらはきらきらと輝きながら いつか思い出となるでし
ょう

わたしが歩き続けてゆく限り
さよなら わたしの永遠の子ども時代
さよなら わたしのピーター・パン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3367n/>

てのひらの天球儀

2010年10月8日14時24分発行